

中野香織

⑥崇高なる紳士モンスター

毎回難問を思いついてくれる敦子さま。

「ノーブルな英国紳士はファンタがお好き？」とは、いやあ、鋭いご指摘でした。アンソニー・ホプキンスのファンタ志向が実は「エレファント・マン」の善き医師時代から潜在していた、とは。「エレファント・マン」を見直すことがあれば、もうあの善きドクターはドクター・ジキルにしか見えないでしょう。いつでもミスター・ハイドになる用意があるという。

ノーブルな英国俳優に化け物役や変態役が目立つのは、この「ジキルとハイド」的な二重性を求められていることもあるかもしれませんね。いかにも平民顔したアメリカ俳優が変態やつでも退屈ですし。

その映画史的源流はハマー・スタジオ、というご指摘を受けてハマー発の映画を調べてみたら、原作を提供したのもやはりほとんどイギリス人でした。メアリ・シェリーの『フランケンシュタイン』は1818年ですが、ステイヴンソンが『ジキルとハイド』を書いたのが1886年、ブラム・ストーカーが『ドラキュラ』を書いたのが1897年、と時代は近い。切り裂きジャック事件が1888年で、「エレファン



アンソニー・ホプキンス

服飾史家である中野香織さんと、映画評論家で字幕翻訳家の齋藤敦子さんの往復書簡的コラム。ファッション誌の映画コラムニストとフランス映画社宣伝部員として出会った中野さんと齋藤さんは、以来10数年、友情を育む。この連載では、イギリス文化とフランス映画という専門分野をベースに映画談議が交わされる。

ドーバー 越えて

齋藤敦子
中野香織



カット・井上陽子

ト・マン」ことジョン・メリックが話題になったのもその頃。化け物全盛の世紀末を先駆けたのが、1865年にモンスター・オンパレードの『不思議の国のアリス』を書いたルイス・キャロルです。ちなみにキャロルは、「クイーン・オブ・ザ・ヴァンパイア」でも出てきた、ロンドンの心靈研究協会の創立メンバーでもあったようです。イギリス人は化け物が好きってのはわかったけど、では、ノーブルな俳優がイメーヂを損ねても化け物を演りたがるのはなぜか？

これについては18世紀のエドマンド・バークが『崇高と美の起源』のなかで理論化している「サブライム sublime」という観念で説明できそうです。バークはサブライムを、「苦痛や危険、つまりあらゆる種類の恐怖を引き起こす源になる対象」と定義してゐるんですが、ここでいう恐怖って、快樂と紙一重なんですね。映画のなかで化け物を見てきゅわって喜び感情がわたしたちにはたしかにあります、その感情の源となる化け物こそサブライム、ってなわけです。たんに美男として讃えられるよりもサブライムとして倒錯的に崇高な愛を捧げられる道を選ぶ。こうでなくては英国紳士の道にはずれないというもんでしょう。